

京都薬科大植物園 教育・研究支え100年

京都薬科大(京都市山科区)の薬用植物園(伏見区日野林)が今年、開設100周年を迎えた。薬用植物園の設置の義務化以前から長きにわたり、同大学の教育や研究を支える場として役割を果たしてきた。

全国有数の規模、800種栽培

同大学の薬用植物園は「実地に生育している状態や形状を生徒に観察させてこそ」という考えに基づき、前身・京都薬学専門学校の薬草園として1925年6月に設置された。現在、薬学部を有する大学に対しては薬用植物園の設置が定められているが、薬草園として誕生した当時

はまた義務化されていなかった。開園当初は現在の寺西幼稚園(山科区御陵天徳町)付近にあったと考えられるという。その後、数回の移設を経て68年に現在地へ全面移転した。2011年はグラウンド南側に薬用植物園御陵園も整備された。



今年、開設100周年を迎えた京都薬科大の薬用植物園



開設して間もない頃の薬草園
(いずれも京都薬科大提供)

治療薬開発の力に

薬用植物園は敷地面積が約1万3千平方メートルと甲子園球場のグラウンドとほぼ同じ広さで、全国有数の規模を誇る。有用植物を集めた見本園のほか、樹木園や温室も備える。漢方薬に配合されるシナモウやマラリア特效薬の原料となるボリビアキナノキなど約800種を栽培し、学生の研究や薬剤師向けの実習などに利用する。

御陵園は本校地から徒歩5分という利点を生かし、学生の実習やオープンキャンパスなどに活用する。敷地面積は約2700平方メートルと薬用植物園に比べると小規模でありながら、抗がん作用があるカンレンボクや天然甘味料として使われるステビアなど主要な有用植物を中心に約200種を植栽している。

薬用植物園長の中村誠宏教授は植物由来の成分を基にがんなど特に治療が難しい疾患の治療薬の開発を行っており「薬用植物園なくては成り立たない。植物は未解明な部分が多く、さまざまな種類を持つておくことが重要だ」と話す。

薬用植物園の移設から50年以上。園内は手を加えず、野生の植物が根付き始めるなど、ありのままの環境が維持されているという。「植物は環境に適応するために変化し、異なる成分を作ったり、含有量を変えたりすることがある。次の50年、100年先の環境を維持し、次世代につなげたい」と中村教授は力を込めた。

(天草愛理)

